

# バーボン・ストリートのバス歌手



加藤 良一

2022年2月21日

思えばもう20年以上前のことになるが、1999年の真夏に訪れたジャズ発祥の地ニューオーリンズはとにかく蒸し暑かった。気候は亜熱帯に近いが、メキシコ湾から吹き込む風のために、そのわりには過ごしやすいほうだという。そういわれてみると、たしかに陽が落ちはじめた夕方からは、外を歩いてもけっこうしのげるくらい涼しくなった。



ホテルから望むミシシッピの大河

筆者が泊まったホテルは、ミシシッピ川までのんびり歩いても数分でたどり着いてしまうほどの至近距離だった。ニューオーリンズの代名詞ともなっているバーボン・ストリートは、そのホテルから一本北側の道路だ。ワンブロック、せいぜい十数メートルしか離れていない。

## ケイジャン料理

アメリカは、料理については不毛の国だといわれている。でもニューオーリンズだけは例外らしい。だからといって決して高級料理があるわけでもない。さっそく、名物のケイジャン料理を堪能してみた。

この辺りではミシシッピ川で獲れる豊富な魚介類を使って、意外と素朴な料理を作っている。味ツケは、基本的に日本人の味覚に合ってあっさりしているように感じた。たとえばザリガニは、クローフッシュと呼ばれてポピュラーで、なまずはキャットフィッシュでなるほどとうなずいてしまう。面白いのは、これはまさか魚介類じゃなかつたと思うのがワニ料理であった。ワニは言わずと知れた爬虫類



土産物店で買ったワニの頭の置物

だが、日本でもその昔、サメのことをワニと呼んでいたこともあるくらいだから、まあ食べ物として魚介類の仲間でもいいのではないだろうか。料理として尾頭付きでは供されないようだ！

バーボン・ストリートにある「**マイクの店**」という人気のレストランで食べた海老料理——これはザリガニじゃなくて正真正銘大きな海老だった。見た目ほど油っこくなく適度にスパイスが利いて、きりっと冷やしたこの地方のビールにぴったり合っていた。

ニューオーリンズとくれば、カーペンターズのヒット曲「**ジャンバラヤ**」(Jambalaya)を思い出す。この歌に出てくる**ジャンバラヤ**も**ガンボ**(Gumbo)もここ南部の料理の名前である。

ジャンバラヤは、スペイン料理のパエリアが起源とされており、ニューオーリンズを一時期支配していたスペイン人によってもたらされたという。庶民的な料理で、ガンボと並んでケイジャン料理と呼ばれるルイジアナ州の代表的な料理である。大きな鍋で作って大人数で食べる事が多く、バーベキューとともに屋外パーティの主役になる。ガンボは、ルイジアナ州を起源とするシチューのようなスープ料理である。



大鍋で作るジャンバラヤ



シーフードガンボ

### バーボン・ストリートのバス歌手

バーボン・ストリートには、夕方になるといろいろなストリート・パフォーマーが出てきて飽きることがない。子供から大人まで、腕やのどに自信がある奴らがみんな小遣いかせぎをしている。タップダンスを披露する子供、楽器の演奏、歌、その他なんでもありなのだ。

マイクの店で食事をすませて勘定をしていたところへ、店の外からよく響く男の歌声が聞こえてきた。迫力のある艶やかな伸びのあるバスだ。ぼくの耳と足は思わずそちらに引きつけられてしまった。背の高い黒人が、仕事帰りなのだろうか、薄汚れた服のまま路上に立ち、ちょうど一人でリサイタルをはじめたところだった。あとから思い出すとあの薄汚れた服はひょっとすると衣装だったのかなと思ったりするが、そのときはそんなことは考えつきもしなかった。

黒人のバス歌手がオープニングに歌いだしたのは「**アメイジング・グレイス**」だった。マイクの店で支払いをしているときに響いてきたのが、この曲の出だし“*Amazing grace ...*”だったのだ。張りのある黒人独特の魅力的な声。通りがかりの人がしだいに集まってきた。聞きほれていたのはぼくらだけじゃなかった。

遠巻きにする聴衆のなかに白人の家族連れがいた。じっとしてられないといった様子で若いお母さんらしい女性がバス歌手に近づいてゆき、アンコールされた「アメイジング・グレイス」を一緒になって歌いだした。黒人の深いた

っぶりしたバスと、白人女性の透きとおるようなソプラノがみごとなハーモニーを紡ぎだした。すごいことだ。こんなことが街なかのそれもふつうの路上で何気なく実現してしまう。

黒人と白人のデュエットは、気取りも飾りもせず、ゆったり流れるミシシッピの流れのごとく夕暮れどきのバーボン・ストリートの景色に自然に溶け込んでいた。筆者は、しばし我を忘れて、夕暮れのひとつきに浸っていた。音楽が街のなか隅々まで流れていた。それこそ、そのへんのドブにだって流れている。こんなことを感じたのははじめてである。日本の町で音楽をここまで身近に感じたことはない。月並みな表現になってしまうが、まるで映画の一シーンを観ているようで、思わずいっしょになって口ずさんでしまった。



バルコニーを飾る手すり (アイアンレースと呼ばれる)



何かリクエストはないか、とそのバス歌手が聞いてきた。筆者はすかさず黒人霊歌「ディーブ・リヴァー Deep river」(深い河)をリクエストした。ところが、あろうことかストリートバス歌手はその曲を知らないという。筆者としては、この曲はニグロ・スピリチュアルの定番だと心得ていたのに、本場アメリカですでに忘れ去られてしまったとでもいうのだろうか。そんなはずはなかろう。それとも発音が悪くて通じなかったのだろうか。



「River」が「Liver」(肝臓のこと、日本語ではレバーというが)のように聞こえたのか。それにしただって、たかが「R」と「L」のちがいでないか。百歩ゆずって「Deep Liver」と聞えたところで、そのくらい東洋人相手なんだから察してくれたってよさそうなものだ。彼はきっとこの曲を知らないにちがいない。そうとしか思えなかった。

時代はどんどん流れている。筆者のような日本人が勝手に定番だと思い込んでいたって、その国ではもう誰も知らないことなどいくらでもあるのかもしれない。その数年前にローマのレストランで、流しの歌手にカンツォーネをリクエストしたときにも、似たような経験をしたのを思いだした。

### ハリケーン・カトリーナの傷跡

2005年8月末、アメリカ南東部をハリケーン・カトリーナ (Hurricane Katrina) が襲った。ニューオーリンズの80%が冠水、死者1800人以上というアメリカ史上最悪の自然災害となった。

「ニューオーリンズ住民の大半が黒人だからブッシュ大統領(当時)に見捨てられた」

政府による救援活動の初動が遅れ、そんな不満が被災者からは噴出し、略奪などが横行し混乱を極めた。カトリーナなどと名前は可愛らしいが、アメリカ社会が抱える矛盾、貧富の格差や人種問題を改めて浮き彫りにしたハリケーンだった。犠牲者の大半は、海拔の低い地域に住む貧しい黒人。「黒人だから救援部隊の投入が遅れた」との怒りが上がり、不満の矛先はブッシュ政権に向かった。

時が経ち、高台には白人が住み、海拔の低い東部地区には黒人、と人種間による住み分けが定着してしまった。堤防決壊による洪水で多くの犠牲者が出たのはもちろん低地の住宅街。こうした地区はハリケーンであつという間に冠水し、連日の猛暑で遺体の腐敗が著しいという悲惨な状態だったという。被災後も「格差」はさらに続いた。高台の富裕層の家は当然ながら被害が少なく、しかも、家財には保険が掛けられている…。

そんな苦難を乗り越えて、今でもニューオーリンズの人々や街はジャズを奏でながらきつと活気を取り戻していることだろう。



[「洗濯船」TOPへ](#)



[Home Pageへ](#)